

委員会活動報告

総務文教委員会行政視察

去る5月9日、10日と広島県尾道市と愛媛県松山市、愛南町を視察しました。

尾道市では、通学区域制度を弾力化し保護者のニーズに応える、小中学校制度を。松山市では、郷土に残る誇るべき財産を「坂の上の雲」の小説を軸とした、21世紀のまちづくりを。愛南町では、学校運営の改善を図り、設置者が必要な支援を行う学校評価システム構築事業を学びました。

尾道市の学校選択制度は、小、中とも新1年生を対象として、市内各学校が受入可能な範囲で、市内全域から受入を行うこの制度。トラブルもなく、年々増加傾向にあります。本市でも通学区域の弾力化の要望もあることから、大変興味深く参考になりました。



松山市「坂の上の雲ミュージアム」

次の松山市では、歴史と文化の織りなすまち全体を、屋根のない博物館「フィールドミュージアム構想」として掲げている発想が素晴らしい。折りしも、今年NHKクスペシヤルドラマ「坂の上の雲」が製作決定。2009年から3カ年放映予定されることもあり、更に、歴史、文化、自然の様々な特色を持つ松山の魅力を引き出して行くであろう。司馬遼太郎作「坂の上の雲」に登場する、秋山好古・真之兄弟・正岡子規ら3人が日露戦争が勃発する激動の時代をひたむきに駆け抜けた姿が、

熱き青年の思いが、時を超え現代によみがえっているように思えてならなかった。新しいものを作るといふより、既存の地域資源を最大限に活用し、官民一体となつて「物語」が感じられるまちを目指すこの事業に感動を覚えました。愛南町の学校評価システムも教育の質の向上を目指すもの。保護者や地域から信頼される学校づくりは、時にかなつているといえる。本市でも是非取り組む価値は大いにあると思えます。

厚生委員会の行政視察

5月10日から2日間、愛知県豊橋市と京都府亀岡市を視察しました。

初日訪れた豊橋市は、人口約38万人の商工農バランスよく発展した愛知県東部の中心都市です。障害者自立支援の取り組みや、休日夜間急病診療所の現地視察を行いました。休日夜間急病診療所は昭和60年の開設で、内科と小児科について日曜・祝日の昼間と、夜間は毎日午後8時から翌日午

前7時まで診察していません。管理は医師会にお願いしており、医師会の内科・小児科医師だけでなく、地元大学の協力の医師の協力のうえで運営されています。これだけの大都市においても、24時間の救急医療体制を維持するためには医師の確保は大変だということ。事業収支をみると圏域人口が多いせいを受診者数も多いため、維持経費は施設の割には小額と思いま



亀岡市ふるさとバス

千人の京阪神大都市圏の住宅都市として発展しています。自然環境保護の取り組み状況やバスの運行事業について視察しました。また、休日急病診療所も訪れました。バス事業については、亀岡市でも地元民間バス事業者の経営悪化に伴い、補助金の増額や路線の廃止などの路線再編案が市に示されました。これに対し市では、バス交通計画委員会で検討した結果、殆どの路線の存続を決めました。市が事業主体となりバス事業者に行き渡り委託し、経済性により小型バスにし、利用の促進を図るため運賃を低額に設定するなどし、亀岡市ふるさとバスとして運行しています。利用者は微増しているようですが、それでも多額の経費が必要となつていきます。市民の足の確保には、かなりの市の負担が必要で

経済水道委員会行政視察

去る5月17日、18日の2



豊後高田市「昭和の町並み」

「昭和の町並みの再現」をシンポジウムなどを重ねて「自然循環」をキーワードにビール工場、畜産農家や家庭から出るごみを有機資源として堆肥・バイオマスエネルギーに変え、土づくりだけでなく、健康・教育・文化など「様々な循環の輪」として捉え「まちづくりの基本方針」とし取り組んでいきます。学校給食も米100%と地元産の

日間、大分県豊後高田市と日田市を視察しました。「貧しくて不便でも笑顔にあふれ 生きてる手ごたえのあったあの時代 お帰りのなさい 思い出の町へ」と昭和の町 豊後高田市(人口25000人)が全国へ向け情報発信する。国東半島随一の賑わいだった商店街も高齢化と過疎化が進み、専門家に依頼した活性化プランは「すばらしい」で「財政的に無理と判断。方向性を「レトロな街づくり」とし、昭和30年代にこだわり、講演会・シンポジウムなどを重ねて「昭和の町並みの再現」を

めざした。商店の看板を木製に、入り口の建具をアルミ製から木製に変える(ミニ二修景事業)ことでレトロな街に、延長550mの商店街に35軒が営業し、「人と人のふれあい」あふれるあの頃のにぎやかな通りに大変身した。行政と地元商工会議所と商店主の思いが一体となり協働で成し遂げたものです。今では10年前の10倍、年間25万人の人が「昭和の建物」に足をとめ「昭和の一品」に目をとめ「思い出の町」を体感しています。日田市(人口75500人)では「自然循環」を

建設消防委員会行政視察

去る5月14日、15日に救急医療体制について、神奈川県秦野市、岐阜県多治見市の消防本部を視察しました。

秦野市は、人口16万8千人、面積103km²で、県央の西部、首都圏近郊に位置し、自然環境に恵まれ、また企業進出により工業が集積した広域拠点都市であります。秦野市では、AED(自動体外式除細動器)の普及啓発に積極的に取り組んでいます。事故や急病などに



多治見市のドクターカー

よる心肺停止患者の救命率を高めるためには、現場に居合せた市民による応急手当の普及啓発、AEDを用いた心肺蘇生などが重要であることから、秦野市では応急手当普及啓発促進活動を平成19年度から重点実施

努力をしています。次に、多治見市は人口11万6千人、面積91km²で、県南部の東濃地域の西に位置し、周囲に丘陵地が連なる盆地にあり、古来から陶磁器の産地として発展してきました。名古屋市のベッタウン化が進み、東濃地域の中心都市であります。多治見市では、岐阜県立多治見病院へ主に救急搬送しており、同病院において、救急救命士の生涯研修、就業前研修、気管挿管研修等救急救命士に必要な研修、救急救命士を中心とした救急隊員のレベルアップのための研修を実施しています。また、不定期ではありますが、ドクターカー運用時同乗の医師から指導等を受けており、救急救命士との密接な連携が図られています。さらに、3年前から救急車の現地到着時間短縮に取り組みしており、覚知から出勤まで3分以内を目標とし、成果を上げています。